

鹿児島県鹿屋市「やねだん」(通称)における取組みと住民意識の変化について

The relation between activities for revitalization and the consciousness of the inhabitants in “Yanedan”

We surveyed the consciousness of Yanedan’s inhabitants by the questionnaire. And we find “the good cycle of autonomy of every inhabitant and impression” in “Yanedan”. We think this is the key point of success of revitalizing “Yanedan”.

はじめに

平成の大合併によりいわゆる「都市」、政令指定都市においてもさえも過疎地域やいわゆる限界集落のような厳しい状況にある地域が増えた中で地域の活性化や高齢化が進む地域住民が健康で幸福な生活を送るにはどのようにすればよいかは都市にとっても重要な課題となってきている。また、今日の国・地方を通じた厳しい財政状況等を考えると、少子高齢化に伴う様々なニーズを行政サービスの拡大で賄うことは困難となっており、以前にもまして地域コミュニティやNPOなど住民が自ら地域の課題を発見し解決することが期待されている一方で、社会経済状態や住民意識の変化等から多くの自治会、町内会等の地縁組織において役員のなり手がなかなかいないことなどに見られるように地域コミュニティの脆弱化が進んできている。日本都市センターにおいては、従来からコミュニティ政策について調査研究をしてきたところであり、コミュニティのガバナンスのあり方など

制度的な側面に特に注目した報告書 を世の中に問うてきたところであるが、地域の活性化等の取組みに成功しているコミュニティに関する取組み事例とともに住民の意識の変化について調査し都市に情報を提供することは意味があると考えたところである。

そこで、いわゆる限界集落のような厳しい状況にありながら行政からの補助金に頼らず住民参加による地道な取組みによって活性化に成功し、地域活性化の優良事例として大臣表彰を受ける¹など全国の注目を集めている鹿児島県鹿屋市柳谷(通称「やねだん」。以下「やねだん」という。)の取組みと住民の意識の変化を調査し紹介することとした。特に、「やねだん」では集落で取り組んだ事業の収益を全世帯にボーナスとして配布するなど経済的な活動の面でも注目される一方で、特に地域の「絆の再生」に成功したことが「青少年の健全育成、高齢者の生きがいと健康づくり、安心・安全な地域社会づくり、地域おこし、産業おこしなどすべての問題が解決」

¹ 「平成19年度あしたのまち・くらしづくり活動賞 内閣総理大臣賞」、「地方自治法施行60周年記念 総務大臣表彰」(2007年)、「農林水産省 地域再生賞 特別賞」(2006年)、「国土交通省 半島地域活性化優良事例」(2005年)、「日本計画学会 計画賞最優秀賞」(2002年)、他多数。

につながっていると高く評価されており²、これらの点と住民の意識との関わりを明らかにしたいと考えた。

まず、第1章において「やねだん」の取組みの概要とその中心となっている豊重哲郎氏(柳谷自治公民館長。以下「豊重」という。)の考えを簡単に紹介する。

第2章で住民の意識調査の方法について説明し、第3章ではアンケート調査から読み取ることのできる「やねだん」の住民の意識の変化について述べる。

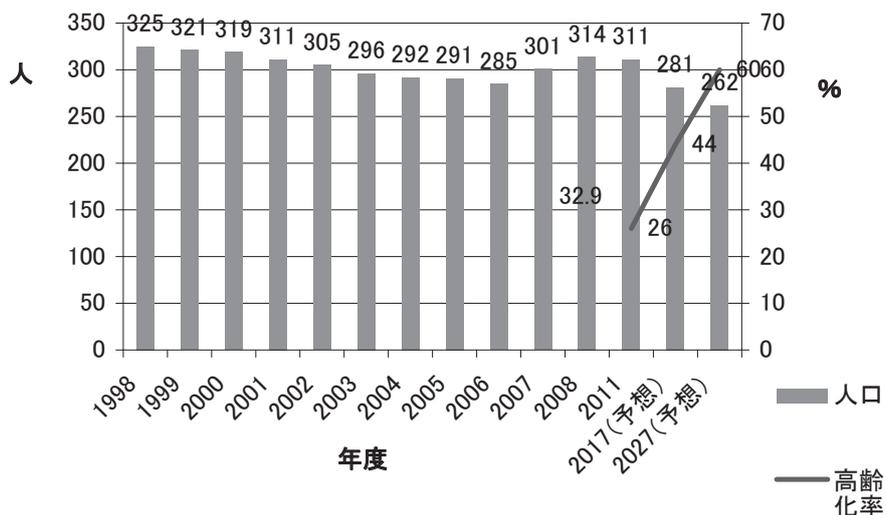
1 「やねだん」における取組みとリーダー豊重の考え

(1) 「やねだん」における取組みの概要とその特徴³

「やねだん」は、鹿児島県鹿屋市東部、串良町上小原の南東(大隅半島中央付近)にある集落で、人口約300名、高齢化率が30%

を超えており(2011年現在)、特産品といえるようなものもなく、人口減少が続いていた集落であった(図1)。しかし、このような状況にありながら、1996年3月に豊重が柳谷自治公民館長に就任して以来、(表1)に見られるように全員が参加する地道な地域活動を続けている。

最初に取り組んだカライモ生産活動は、豊重がクラブ活動の指導等を通して親交のあった高校生たちに楽しい目標を持たせて彼らを主体に取り組んだ事業である。豊重は集落が活動するためには自主財源の確保が重要だが、住民に新たな金銭的負担を求めるのではなく、遊休地を借用して栽培したカライモの販売益を活動経費に充てようと考えた。豊重の様々な努力もあって最初は横を向いていた住民も高校生をバックアップするようになった。また、ほぼ同時期に取り組んだ「わくわく運動遊園」の建設は役所の補助金や各戸の



(図1) やねだんの人口と高齢化率

² 椎川忍『緑の分権改革—あるものを生かす地域力創造』学芸出版社(2011年)、26-29頁。佐藤喜子光・椎川忍 編著『地域旅で地域力創造—観光振興とIT活用のポイント—』学芸出版社(2011年)、17頁。

³ 豊重哲郎『地域再生—行政に頼らない「むら」おこし—』出版企画あさんてーな(2004)ではコミュニティ活動に住民の自主参加が進んでいく過程を詳しく描かれているので本稿では簡単な紹介にとどめた。ぜひご一読されることをお勧めする。

(表1) 「やねだん」－活動の概略 (豊重哲郎 2004 及び「やねだん」HP 等から作成)

1996年 3月	豊重哲郎氏が柳谷自治公民館長に選出される
1997年 6月	カライモ(サツマイモ)生産活動 「わくわく運動遊園」建設開始 「異郷からのメッセージ」放送開始
1998年 4月	活動拠点「わくわく運動遊園」完成(20アール) 高齢者対象のリハビリコースの整備
1999年 12月	通学路での「おはよう声かけ運動」開始
2000年 4月	土着菌の製造・活用の開始
5月	小中学生対象に「寺子屋」運営開始 まさかの時の緊急警報装置(介護用)設置
2001年 5月	噴水・ピオトープの整備
12月	まさかの時の緊急警報装置(煙感知器)設置
2002年 3月	土着菌センター建設 お宝歴史館建設
11月	日本計画学会 計画賞最優秀賞受賞
2003年 8月	柳谷安全パトロール隊の発足 サンセットウォーキング大会の実施
11月	まさかの時の緊急警報装置(防犯ベル)全戸設置
2004年 3月	焼酎「やねだん」開発
5月	柳谷未来館建設 手打ちそば食堂の外業
8月	政府農村モデル選定
2005年 6月	半島地域活性化優良事例受賞(国土交通省) MBC賞(南日本放送)受賞
2006年 1月	土着菌による足浴オープン 農林水産省 地域再生賞 特別賞受賞
5月	全世帯に1万円のボーナスを支給
11月	第57回南日本文化賞(地域文化部門)受賞 県民表彰(社会活動部門)受賞
2007年 1月	迎賓館(空き家)に芸術家移住第1号
11月	平成19年度あしたのまち・くらしづくり活動賞 内閣総理大臣賞 受賞 地方自治法施行60周年記念 総務大臣表彰 受賞 第1回 故郷創世塾 開講
2008年 5月	第1回めったに見られない芸術祭
2010年	わくわく運動遊園に運動器具設置

負担金に頼らず、集落の人々が資材と労力を出し合い、最終的に約8万円の予算で完成させており、これらの取組みを通じて住民全員が「やねだん」の事業に参加するようになった。

この後も様々な取組みが行われている。例えば「異郷からのメッセージ放送」では、メッセンジャー役の高校生が、集落から離れた子

供や孫から親や祖父母に宛てた手紙を読み、有線放送を通じて集落全体に流される。離れ離れに住む家族のつながりを確認するのみならず、地域の一員でありながら日常生活では地域とのつながりが少ない高校生に出番を与え自らの「存在感」(地域での自らの役割・貢献)に気付くきっかけとなっている。また、一人暮らしや寝たきり同然の高齢者の住まい

に「まさかの時の緊急警報装置(介護用)」を設置し、警報に気付いた周囲の住民が対応する体制を整備している。さらに、「柳谷安全パトロール隊」を組織し、ポイ捨て、子供たちへの嫌がらせ、泥棒等の不審者、一人暮らしの高齢者の見回りを行うことにより、地域の住民が協力することで安心と安全を確保しようとしている。

自主財源の確保の面では、住民総出で土着菌や「やねだん」焼酎の製造販売を始めている。土着菌は畜産臭気対策として地元の養豚家の経験をもとに鹿児島大学の知見も得て取り組んだものであり、畜産の臭気対策とともに土壌改良にも効果を発揮している。また、土着菌を撒いた畑で栽培したカライモから焼酎を製造(製造は地元の酒造会社に委託)した。これらは人気を博し、これらの収益が「やねだん」の自主財源の充実に貢献している。

2007年1月には、集落内の空き家を地域住民の力で整備した「迎賓館」に芸術家を迎えた。芸術家たちは「やねだん」で制作活動に取り組み、芸術祭を開催するなど身近に芸術に触れる環境ができた。この前年には柳谷の集落の人口は285名まで減少したが、2007年には301名と増加に転じている(図1)。芸術家を迎え入れたことなどをマスコミが取り上げたりすることにより、集落から出た若者が「やねだん」に対する誇りや愛着を感じ戻ってきたりしたことによるものである。

さらに同年、豊重は地域づくりにおけるリーダーの育成を目的として「故郷創世塾」を開講し、「やねだん」の地域づくりを学ぶことを望む者を全国から集めている。この「故郷創世塾」は2011年11月に第10期生を

排出するほど好評を博している。また、「やねだん」に來訪する視察者は現在では年間5000人を超えているとのことである。他地域から「やねだん」に学びに來るものが多いことは、住民が自分たちの取組みが素晴らしいことを認識することにつながっていると考えられる(「やねだん」住民からの聞き取り)。

(2) リーダー豊重の考え方

豊重は、自治公民館(いわゆる自治会・町内会)の運営はボランティア的活動だけでは限界があることから、人に希望を与え集落民を元気にさせることが必要であり、そのため不可欠なものとして、住民一人ひとりの理解ある賛同の「意識」と絶大な円満の「和」を挙げている。具体には「全員で立ち向かう時に生まれる結束力と、達成したときの感動の共有」が地域づくりの大きな原動力となると考えている。「感動を共有」することにより、人を無理やり引きずり回す「命令」によらず自主性をもって全員が参加することに重きを置き、常に集落の人々に目配せし「出番」づくりを考えているとのことである。

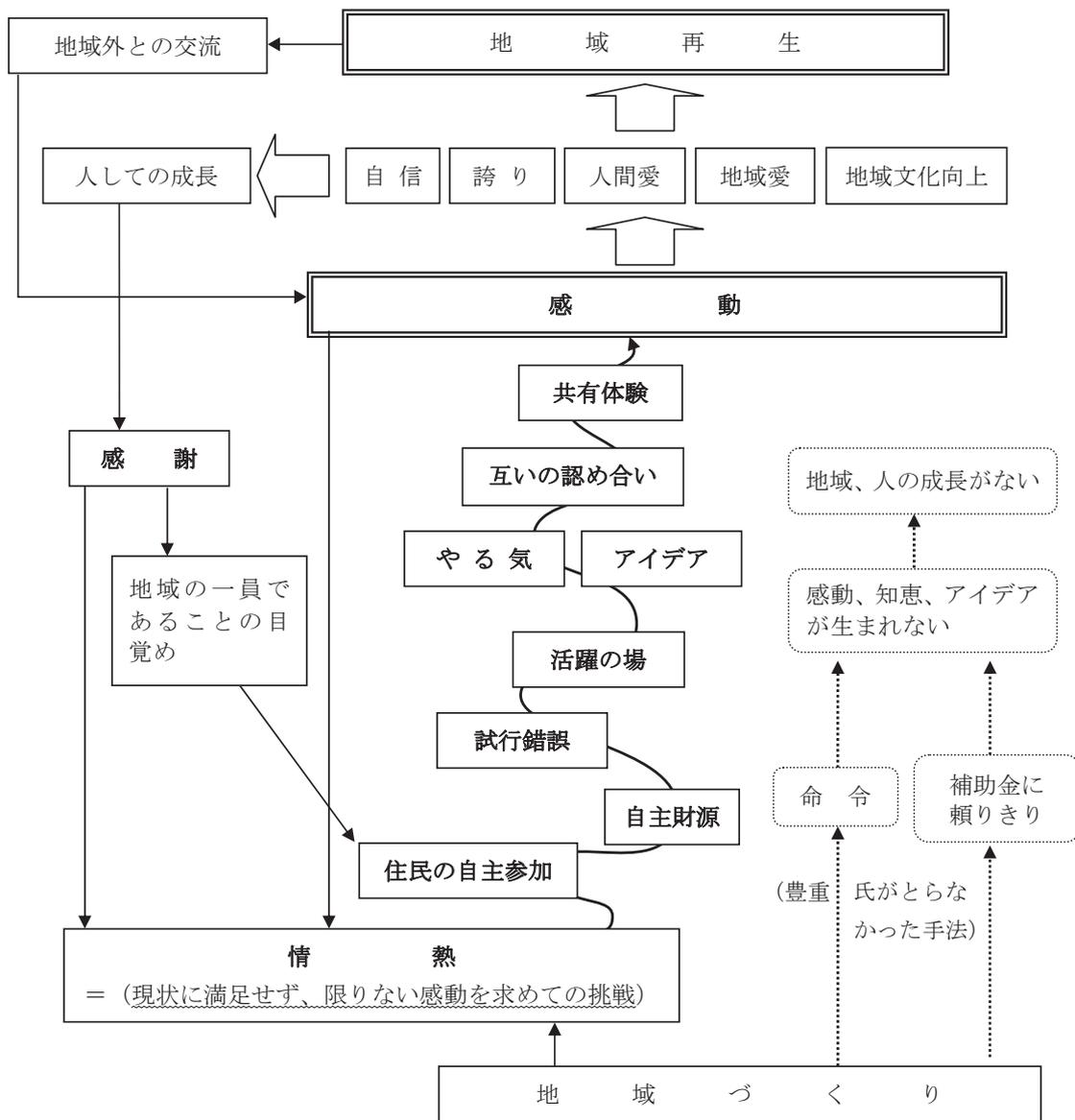
さらに豊重は、自治公民館の運営に必要なもう一つの重要事項として、活動資金(財力、自主財源)の確保を挙げている。これはまさしく「補助金に頼らない」で自主財源によりわくわく運動遊園の建設をはじめとした地域づくりを進めている理由そのものである。つまり、補助金の対象となるものは出来上がりが既に決まっており、そこに至るまで「感動も知恵もなく、人間一人ひとりのアイデアの出番もない」からだという。集落の住民が「自

ら知恵を出し、考え、試行錯誤する」中に「出番が生まれ、やる気を誘発し、一人ひとりの存在感を認め合いながら」進むことに豊重は大きな価値を見出しているのである。

なお、あらゆる場面で豊重が使う「感動」という言葉は、住民一人ひとりが具体的な経験や時間を共有しながら自らの存在感を意識することを言っていると思われる。このことはマスコミを積極的に活用することによる外

部からの評価とともに、住民が満足感を得る仕掛けづくりになっていると思われる。

ここまで述べてきた考えを図式化したものが(図2)である。「自主性」から「試行錯誤」を繰り返す中で「アイデア」や「やる気」が生まれ、「互いに認め合い」、「共有体験」を重ね、「感動」を共有する。これが人間的な成長を促し、「感謝」の気持ちを生じ、「情熱」を生み、再び住民の「自主参加」を促進する



(図2) やねだんの「『自主性』と『感動』の循環」による地域づくり

という、『自主性』と『感動』の循環」を生成していると考えられる。

2 「やねだん」住民の意識調査の方法

(1) 意識調査の方法

成功の鍵となっている地域の絆の再生は、豊重がその重要性を説く住民の意識改革と密接に関係していると思われること、経済的な側面についても住民の意識に表れると考えられることから、アンケートによる意識調査を中心に「やねだん」住民の意識、特に様々な取組みの前と現在との比較に重点をおいて調査した。

アンケート調査の概要(実施方法等)は以下のとおりである。

調査対象:「やねだん」に居住する20歳以上のすべての方

調査方法:アンケート用紙を対象者全員に配布、無記名で封筒に封入し回収

実施時期:2011年9月

回収率:71.4%(回収数185⁴ / 対象者数259人)

住民の意識の変化を知るため、「やねだん」の住民に対して同一の質問について現在の気持ち・考えと、豊重が自治公民館長に就任した1996年頃のことを聞いた⁵。「やねだん」の住民の現在の意識を全国の状況等と比較することで、地域の特徴も明らかになると考え、「平成21年度国民生活選好度調査結果」

(内閣府2010)(以下「選好度調査」という。)を活用することとし、選好度調査の質問項目をアンケートに用いた。また、本稿では触れることはできないが、いわゆる「限界集落」に近い「やねだん」と地域特性が全く異なる都市的な地域との比較も有用と考え、「第35回荒川区政世論調査結果」(荒川区2011)(以下「荒川区調査」という。)の質問項目についてもアンケートに用いた⁶。本稿で紹介する項目に対する回答は、幸福度については0点から10点までの11段階で、その他の項目は5段階で聞いた(質問項目は各図を参照)⁷。

現地の確認等のため、事前調査を2010年12月3日・4日、2011年4月23日・24日に、補足調査を10月4日・5日に行った。

なお、本調査のアンケートの設計及び集計における統計分析等においては華山宣胤尚美学園大学教授にご助言いただいた。

(2) 本アンケート調査における課題と対応

前節で説明したように、「選好度調査」と「荒川区調査」との比較を考え、両調査の質問項目を取り込み、さらに現在と過去について回答を求めたため、質問項目と回答箇所数が多くなり、過去の1996年頃の気持ち・考えに対する高齢者の回答率が他年代と比較して著しく下がった。さらに、高齢者の中でも現在の幸福度が高いと回答している人では1996

⁴ すべての質問に無回答の9件を除いた。

⁵ 1996年以降に「やねだん」に引っ越してきた方(いわゆるUターン・Iターンの方)については、1996年頃の気持ち・考え方を記載するに当たって「やねだん」に引っ越す前の気持ち・考えを記載していただいた。

⁶ これらの調査はいわゆる「幸福度」着目したものであり、その要因等に関する質問があり、「やねだん」での生活全体の満足度とその要因を分析するのに適当と考えたこと、また、本文のように比較対象のデータが得られることから利用することとした。なお、幸福度については、新成長戦略(平成22年6月18日閣議決定)において政府として調査研究を進めることとされている。

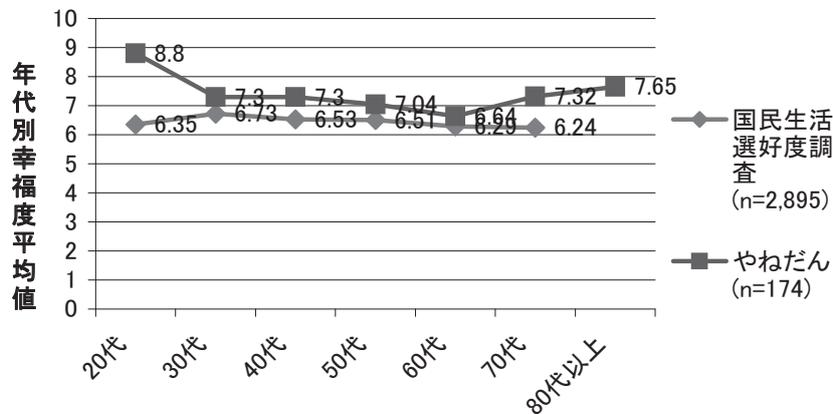
⁷ 質問票は当センターのホームページで公表する予定。ただし回答については小集落でサンプル数が少ないことから回答者が特定される恐れがあるため公表しない。

年頃の気持ち・考えについて回答しなかった方が多かった⁸。このため「現在について答えている集団」と「1996年頃について答えている集団」との間に同質性があると見なすことは難しく通常の統計分析手法を用いることは避けることとした。具体には、1996年頃について未回答の方の属性（他の回答から推測される考え方等）を考慮に入れて、現在についてのみ回答している方たちが1996年頃について回答するとすればどのように回答するかできる範囲で推測した⁹。また、比較を行う際には比率のみならず「回答者数」を重視した。例えば現在の気持ち・考えについての回答者数に対して1996年頃の回答者数が同数以上であれば未回答者がしたであろう回答を考慮しても1996年頃は現在よりも大

きな比率になると考えた。

（1）1996年頃の住民の意識（推測）と現在の意識との比較

アンケート調査では「やねだん」の現在の幸福度の平均は7.19、1996年頃は7.06となっており、前節の検討を行ったところ、未回答の方を考慮しても両者では大きな差は生じないと考えた（選好度調査と「やねだん」の現在との比較は（図3）参照）。なお、幸福度については同一個人を継続観察すると時間の経過とともに下がっていくという研究もあり¹⁰、同一の個人に1996年当時と現在との状況を聞いた結果、幸福度が大きく変わらないということは、相対的に幸福度は上がっているとも考えられるであろう。



（図3）幸福度～選好度調査と「やねだん」の現在の意識

⁸ 例えば、幸福度に関する質問では、現在については179人が、そのうち過去については122人が回答している（57人が過去について未回答）。回答をしていただいた70歳以上の方（77人）を見ると、現在についての質問は70人が答えているがそのうち現在の幸福度が高い（7点以上）と回答した方（49人）で過去について回答されていない方は30人に上る（10点11人、9点7人、8点9人、7点3人）。

⁹ 本稿では紙幅の関係で割愛するが、過去についての未回答者の幸福感を判断する基準（例えば「過去の自分との比較」等）も参考に検討した。

¹⁰ 『国民生活白書 平成20年版』2008年、61頁では、今までの欧米の研究では年齢が上がると幸福度が下がり、その後高齢者は上がるというU字型の曲線が知られていたが、日本では高齢者になるほど下がるという傾向が出ていることを指摘している。このことについては、同一個人を継続的に観察して記録したパネルデータを用いた研究により、U字型は純粋な年齢による効果とのちの世代ほど不幸になっているという世代効果の両方の要素が重なっているという見方が示されていることを筒井義郎は指摘している（エコノミスト2005.4.19号）。筒井義郎・大竹文雄・池田新介（前掲23、42頁）では大阪大学COEが独自に行ったアンケート調査を分析し、加齢とともに幸福度が下がることを示している。「平成21年度国民生活選好度調査」第3表では、30歳代を最高に幸福度は年齢とともに低下していることを示している。

以下、幸福に関係すると考えらえる要因について考えてみる。

ア 生活に対する満足度の変化

(図4)を見ると、「家計の状況(所得・消費)」については、「満足している」と「まあ満足している」と回答したものを合わせる

と、現在が66人、1996年当時が62人であり、回答者数を考えるとこの点は悪化していると考えている人が多いと思われ、また1996年頃と比較した世帯収入の増減についてのアンケート結果からも(表2)全体として好転しているとは思われない。また、「健康状況」や「住宅周辺の交通の利便性」については、「満



(図4) 生活に対する満足度比較

(表2) 「やねだん」における「世帯収入の1996年頃と比較した状況」

	回答者数 n	(20%超) 大幅に増えた	(10%~20%) かなり増えた	少し増えた	ほとんど変わらない	少し減った	(10%~20%) かなり減った	(20%超) 大幅に減った
全体 (%)	150	7	9	24	33	23	21	33
	100.0	4.7	6.0	16.0	22.0	15.3	14.0	22.0

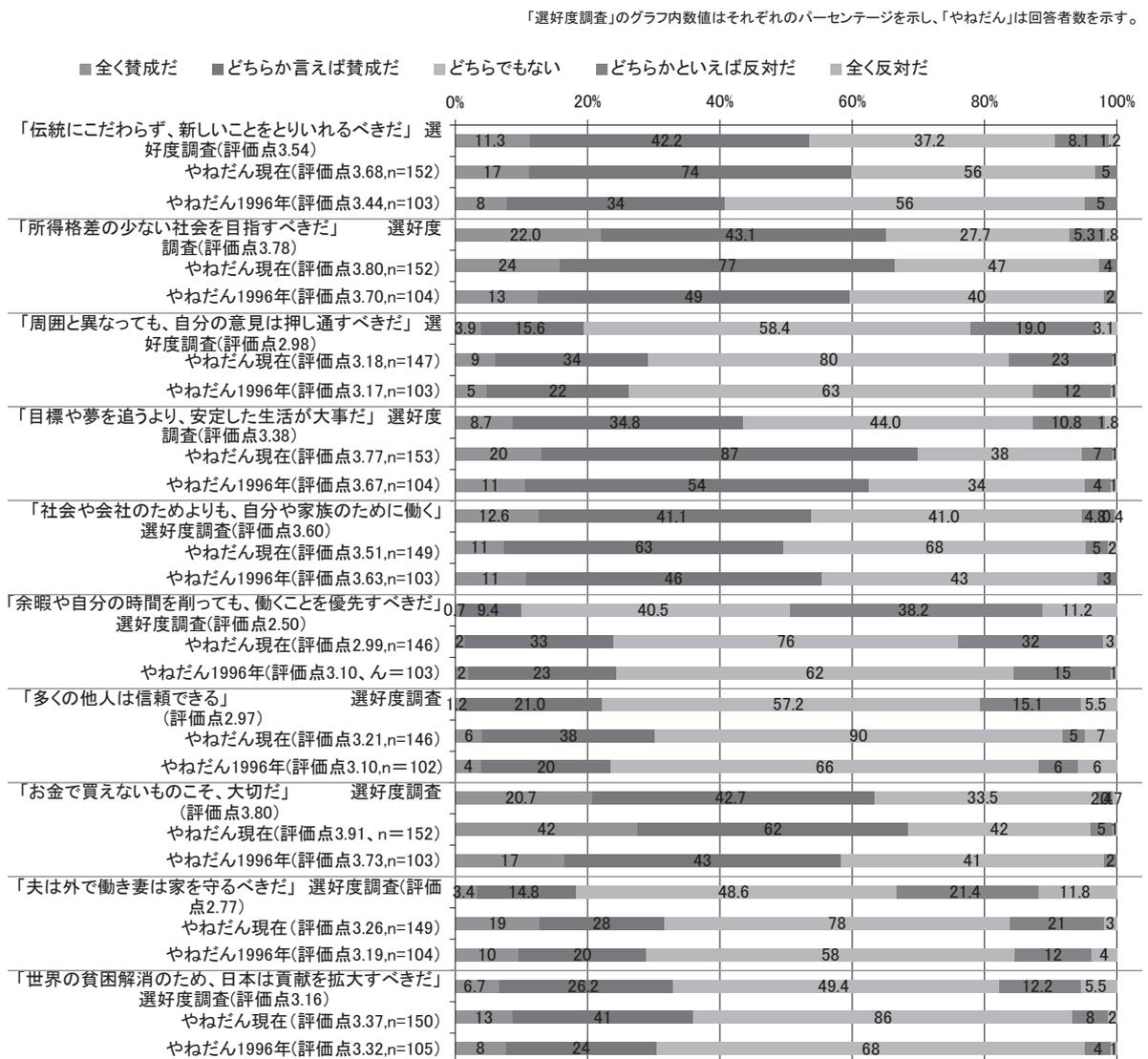
足している」と「まあ満足している」と答えた人数は現在も 1996 年当時についてもほぼ同じである。このことはこれらの点についても満足度が下がっていると考えられる。

「地域の教育環境（やねだんの塾等含む）」や「住宅周辺の安全、環境」といった点については、「満足している」と「まあ満足している」と現在について答えた人は 1996 年当時の約 2 倍であり、これらに対する評価は高まっている。

「幸福感」に対して大きな影響があると思われる、家計の状況や健康状態や居住地域の利便性といった面で評価が落ちながら、「幸福度」そのものが落ちていない点は注目に値するのではないか。

イ 社会・生活に関する意識の比較

(図 5) に見られるように、「伝統にこだわらず、新しいことをとりいれるべきだ」、「多くの他人は信頼できる」、「お金で買えないものこそ、大切だ」

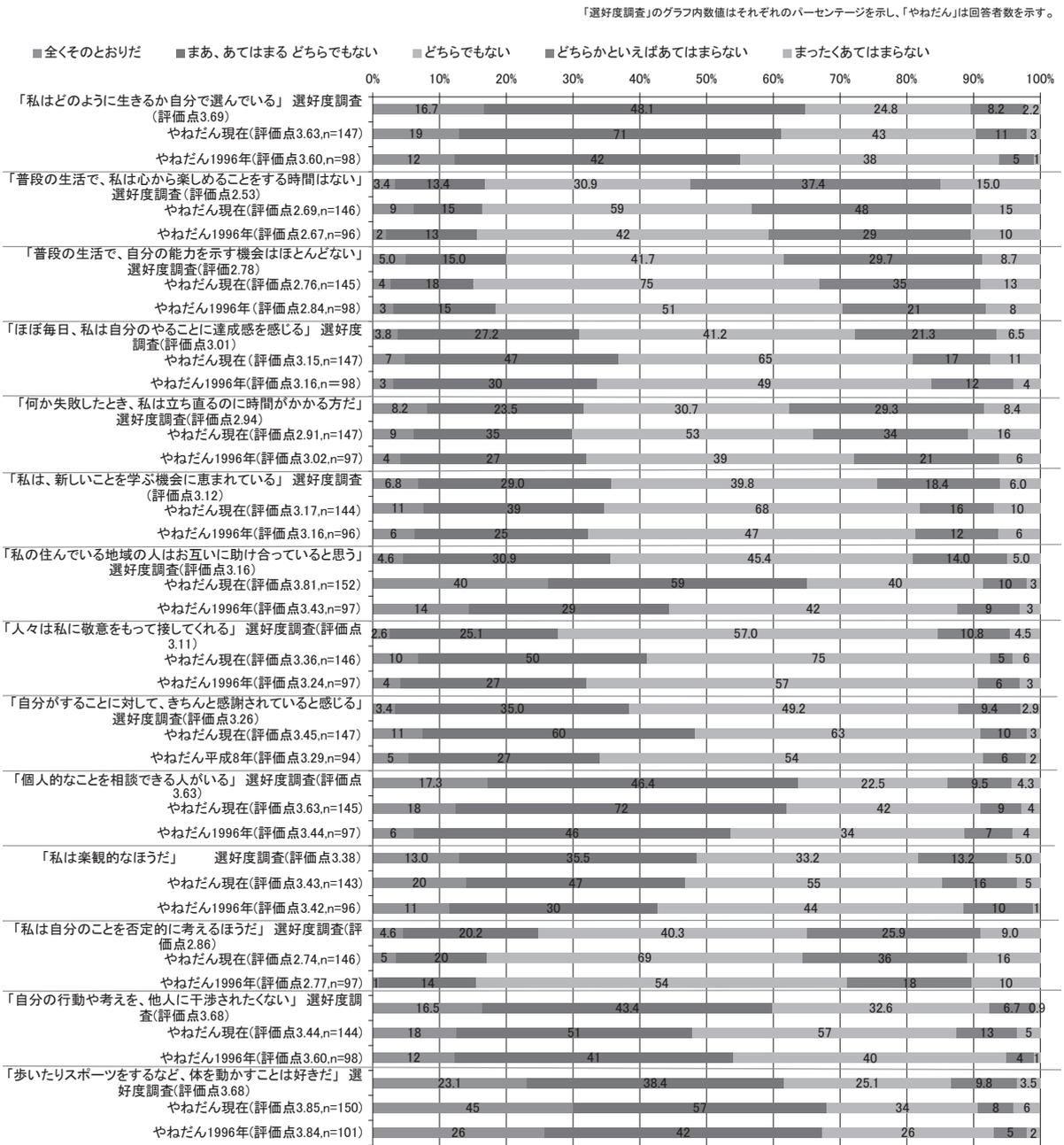


(図 5) 社会に関する意識の比較

のこそ大切だ」といった点については、1996年当時と比較してこれらの考え方に肯定的な人が増えている。

(図6)からは、「私の住んでいる地域の人はお互いに助け合っていると思う」、「人々はお互いに敬意をもって接してくれる」、「自分のすることに対して、きちんと感謝されていると感じる」、「個人的なことを相談できる人がいる」¹¹といった点についても肯定的な人が増えていることがわかる。

私に敬意をもって接してくれる」、「自分のすることに対して、きちんと感謝されていると感じる」、「個人的なことを相談することができる人がいる」¹¹といった点についても肯定的な人が増えていることがわかる。



(図6) 生活に関する意識の比較

¹¹ この点は、「まったくあてはまらない」又は「どちらかといえばあてはまらない」といっている人が現在と1996年当時がほぼ同数であり、相談相手がいない孤立した人が減ったと考えられよう。

これらのことから、人との関係は強まりながらも、新しいことに取り組んだりする進取の精神が高齢化の進む中で強まっていることは面白いところであろう。

(2) 「やねだん」における取組みと住民の意識の変化

地域の活性化に成功していると言われている「やねだん」だが、個人・世帯の経済的な状況は好転しているとは見えないし、この点については住民の満足度も下がっているようである。その中で幸福度が大きく下がらないのは、満足度が高まっている他の部分が寄与しているからと考えられよう。この満足度が高まっているところを見ると、「地域の教育環境（やねだんの塾等を含む）」や「住宅周辺の安全、環境」など、子供たちの教育のための塾の開講や、荒地の整備、生け垣の選定等の環境整備等「やねだん」が集落で取り組んできたことに関係しているように見える。

また、(図5)及び(図6)から読み取ることができる住民の意識の変化を見ると、「やねだん」における取組みの考え方を図式化した(図2)、と重なってくる。つまり、住民の自主参加と自主財源による事業の推進から生まれる「試行錯誤」等が、「伝統にこだわらず、新しいことをとり入れる」ことに前向きな住民の意識を作っているのではないか、また、「互いの認め合い」、「共有体験」、「感謝」といったことが、「お互い助け合っていると思う」という意識や「敬意を持って接してくれる」、「自分のすることに対して、きちんと感謝されていると感じる」といった地域をつくっているのではないか、そのように考える

ことができよう。

3 おわりに

本稿における分析は、回答の状況から一定の推測に基づくところもあり、更に詳細に検討すべき点があると思うが、本調査により「やねだん」が活性化に成功したと言われる根底には、経済的な満足度よりもむしろ住民が自主的に自ら考えながらそれぞれの役割を果たし、周囲からも評価されるなかで、住民の意識が変わり、それが地域の絆を強め、住民の幸福感を増しているという「『自主性』と『感動』の循環」(図2)による地域づくりが機能している点であることが浮かび上がってきたと思う。

今回実施した調査には、本稿では今回取り上げなかった荒川区調査と比較するための質問や、選好度調査の質問項目の中でも幸福感を判断するための基準等についての質問もあり、これらに関する結果及び分析については稿を改めて紹介したい。

最後に、本調査を企画し実施するに当たって清水浩和研究員をはじめ、都市からの派遣研究員であった池田高志研究員、澤田大輔研究員、谷本泰洋主任研究員には関係文献の収集・整理、アンケート調査の実施等において大変お世話になった。この場をお借りしてお礼申し上げたい。また、何といたってもこのようなアンケート調査を快く引き受け絶大なご協力をいただいた豊重氏をはじめとする「やねだん」の皆様にご心からお礼申し上げ本レポートを締めくくりたい。

(日本都市センター研究室 宮田 昌一)

参考文献

- 荒川区「第35回荒川区政世論調査報告書」2011年、<http://www.city.arakawa.tokyo.jp/kusei/chosa/yoronchosa/yoronchosa35.html> (2012.1.26 アクセス)
- 椎川 忍「序章 地域力創造」、佐藤喜子光・椎川忍編著『地域旅で地域力創造 観光振興とIT活用のポイント』学芸出版社、2011年
- 椎川 忍『緑の分権改革 あるものを生かす地域力創造』学芸出版社、2011年
- 白石 賢・白石小百合「幸福度研究の現状と課題—少子化との関連において」内閣府経済社会総合研究所、経済分析179号(2007年)
- 末廣 昭「第3章 アジアの幸福と希望「国民の幸福」戦略と個人の新たな選択」、東大社研・玄田有史・宇野重規編『希望学 [1] 希望を語る 社会科学のあらたな地平へ』東京大学出版会、2009年
- 豊重哲郎『地域再生—行政に頼らない「むら」おこし—』出版企画あさんてさーな、2004年
- 辻 隆司「「幸福度」は地域政策の検討に役立つのか～ Subjective Well-being に基づく地域分析の試み～」みずほ総合研究所株式会社、Working Papers 2010年12月13日
http://www.mizuho-ri.co.jp/publication/sl_info/working_papers/pdf/report20101213.pdf
http://www.mizuho-ri.co.jp/publication/sl_info/working_papers/pdf/report20101213.pdf (2012.1.26 アクセス)
- 辻 隆司「日本人の幸福の源泉を探る～アンケート調査結果にみる日本人の主観的幸福度～」みずほ総合研究所株式会社、Working Papers 2011年10月31日
http://www.mizuho-ri.co.jp/publication/sl_info/working_papers/pdf/report20111031.pdf
http://www.mizuho-ri.co.jp/publication/sl_info/working_papers/pdf/report20111031.pdf (2012.1.26 アクセス)
- 辻 隆司・眞鍋尚行・大塚亮一「重要度が増す『幸福度』研究—生活者の視点に立った新たな行政評価指標の構築に向けて—」みずほ総合研究所株式会社、Working Papers 2009年9月17日
- 筒井義郎・大竹文雄・池田新介「なぜあなたは不幸なのか」大阪大学経済学58巻4号(2009年)
- 内閣府「国民生活選好度調査 平成21年度 国民の幸福感の現状、幸福感とその判断、政策への期待と満足度、新しい公共関係」2010年、<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/senkoudo.html> (2012.1.26 アクセス)
- 内閣府『国民生活白書 平成20年版』2008年
- 日本都市センター『近隣自治の仕組みと近隣政府—多様で主体的なコミュニティの形成を目指して—』2004年
- 日本都市センター『英・独・仏における「近隣政府」と日本の近隣自治』2004年
- 日本都市センター『近隣政府への途—地域における自治システムの創造』日本都市センターブッ

- クレット No.7、2003 年
- 日本都市センター『自治的コミュニティの構築と近隣政府の選択』、2002 年
- 日本都市センター「コミュニティ・近隣政府と自治体計画—その軌跡と展望」日本都市センター
ブックレット No.6、2002 年
- 日本都市センター『近隣自治とコミュニティ—自治体のコミュニティ政策と「自治的コミュニティ」の展望』、2001 年
- 松浦克己「黄昏の幸せ—高齢者の幸せ感を支えるもの」郵政研究所、ディスカッションペーパー・
シリーズ 2002-02 (2002 年)
- 村田久「日本人の幸福度の推移と現状—日本は豊かさと幸福を手に入れてきたのか？」
ESTRELA198 号 (2010 年)
- 森川正之「地域間経済格差について：実質賃金・幸福度」(独) 産業経済研究所、RIEI
Discussion Paper Series 10-J043、2010 年、[http://www.rieti.go.jp/jp/publications/
dp/10j043.pdf](http://www.rieti.go.jp/jp/publications/dp/10j043.pdf) (2012.1.26 アクセス)
- 山根智沙子・山根承子・筒井義郎「幸福感ではかった地域間格差」、大阪大学、GCOE
Discussion Paper Series 7 号 (2008 年)、[http://www.iser.osaka-u.ac.jp/coe/dp/pdf/no.7_
dp.pdf](http://www.iser.osaka-u.ac.jp/coe/dp/pdf/no.7_
dp.pdf) (2012.1.26 アクセス)
- やねだん HP、<http://www.yanedan.com/index.html> (2012.1.26 アクセス)